

谷美智士先生 研究業績(抄)

『日本東洋醫學會誌』

皮膚の電気的特性に関する研究

——特に経絡、経穴に関連して——

小田原 間中喜雄・谷美智士

日本東洋醫學會誌 20 (4) : 21-29, 1969

東洋で広く行われている経験的治療である針灸は、いろいろの疾患に有効であることが一般に信ぜられているが、その治療機転に関する理論はまだよく判っていない点が多い。我々は、この種の“刺激療法”の効果を二つに分けて、(1)神経系に対する刺激作用、(2)生体の電磁場に及ぼす変化として観察することを試みた。後者はもちろん前者と不即不離であるが、実験的には、刺激を（これも定義によって異なるが）ほとんど加えないで、生体に電磁的变化を起させ、針灸効果とアナログな変化が起り得るかを試みてみた。そして東洋医学の臨床法則を、その意味で応用すると、治療効果が得られる事実を

確認し得た。

これによって従來說明の充分できなかつた気候病（疼痛・その他）の発生、従ってまたその治療の手懸りが得られた。また従来、中国古典に記載されていながら臨床的応用方法が知られて居なかつた“奇経”、平田内蔵吉が提唱した“十二反応帯”というパターン等が、この種の治療操作にとって重要な意味を持つことを認め得た。

これ等の予備実験に基いて著者等は更にその方法の改善、臨床効果の吟味、針灸理論への新しい視野の提供を試みようとするものである。

（以下本文は英文、略）

皮膚の電気的特性に関する研究（特に経絡、経穴に関連して）

——原穴の皮膚電気抵抗傾斜について——

小田原 間中喜雄・谷美智士

日本東洋醫學會誌 21 (3) : 19-25, 1970

鍼灸治療を指標化する一つの方法として、最近、原穴の皮膚電気抵抗測定（Electric Skin Resistance of Source Points = E.R.S.）が行なわれている。そしてその値の個々の比較的平均化が疾病の治療と同向性があるとの報告がある。けれども一部の疾患、例えば慢性蕁麻疹、気管支喘息等の疾患について観察したところ、症状や訴えの出現及び軽快に関しても診断法の適合しない例にしばしば遭遇した。

この点について他の因子が関与している可能性を認めた。すなわち健康と思われる50人の高等学校運動部部員についてE.R.S.と腹部圧診を行い、陰経では下肢の方が、陽経では上肢の方がより通電量が多い傾向を認め、これをthe Gradient of E.R.S. (G.E.R.S.)と名づけた。このE.R.S.とG.E.R.S.は腹部圧診所見と76%の一致率が認められ、この新しい因子を考慮に入れると上記疾患に関してE.R.S.の診断的価値は

改善され、我々のいう Electromagnetic Therapy (E.M.T.) の適応を知る上で重要なことが解った。

以上のことから G.E.R.S は E.R.S. の診断治療において無視出来ない一因子であると信ずる。

(以下本文は英文、略)

皮膚の電気的特性について

——正常人原穴電気抵抗値の経絡的傾斜について——

小田原 間中喜雄・谷美智士

日本東洋醫學會誌 21 (3) : 26-31, 1970

人体の原穴皮膚電気抵抗値を診断治療の指標とする針灸治療は、その抵抗値の比較的平均化を主目的として著効を得るとの報告があり、我々も又日常診療においてしばしば経験するところであります。最近我々は、アルコール性慢性肝炎と慢性蕁麻疹とを併発した患者に針治療を行い、その治療前後の原穴抵抗値を比較検討

し、抵抗値バラツキの点では蕁麻疹の出現を見なくなった後特別な変化が認められなかった一例を経験し、バラツキ以外の因子関与の可能性が考えられました。そこで私達は、健康人男女各々 25 人計 50 人につき原穴皮膚電気抵抗測定を行い、腹診、脈診との比較を加えて検討致しました。(以下略)

皮膚の電気的特性に関する研究

——原穴皮膚電気抵抗の 1 日変化と中国臓器時間——

Electrical Studies of Certain Characteristics of the Skin Surface of Human Body

神奈川 間中喜雄・谷美智士 東京 小池盛夫 (東洋医学研究所)

日本東洋醫學會誌 22 (4) : 27-35, 1971

本法は中国においては現在もなお重要視されているようであるが、我が国ではこの時間的概念が日常診療に加味されることは極めて稀れと思われる。著者等は最近、夜間にのみ発熱する明かに時間的に変化する症状を持つ興味ある一症例を経験した。

本症を治療するに際してその主症である肝虚に対し通常の鍼灸治療を行ったが成功せず、時間因子を考慮に入れたいわゆる流注針法ではじめて治癒せしめ得たことから、その存在を確かめるため、次の様な測定実験を行った。

健康と思われる 16 ~ 32 歳の男女 14 人に対し 2 時間間隔、連続 12 回すなわち 1 日間の原穴皮膚電気抵抗 (E.R.S) 測定を前後 1 年間にわたって計 28 回行い、その百分率平均を中国臓器時間表と比較するとき、12 経中 9 経は各々の臓器時間に応じて E.R.S は減少し 1 日を 1 サイクルとしたほぼ正弦曲線を示したが、胃、心及び三焦の 3 経には一致をみなかった。又、変化の激しい経では 40% 以上の変化を認めた。

(以下本文は英文、略)

〔臨床経験〕 帝王切開における針麻酔

Acupuncture Anesthesia of Caesarean

東京 谷美智士・蠣崎要 静岡 石塚栄一

日本東洋醫學會誌 23 (4) : 17-25, 1972

漢方医学のなかで鍼灸は、東洋、とくに中国において哲学思想——陰陽五行——を背景とし

て、古くから発達した医術である。その源泉は、古代メソポタミア文明や、古代インド医学にもみることができる。それらは、しだいに中国へと伝わり、お互いに影響を与えつつ独自の発展をとげたものと思われ、すでに紀元前4世紀頃には体系づけられ「黄帝内経」に集大成されている。

一方、日本への漢方医学の伝来については、

諸説があるが、大体5世紀初期の頃とされている。その後、明治維新まで、日本の医療の主流を占めてきた。

最近、著者らは、鍼刺激による麻酔の産婦人科領域における手術への応用の可能性を追究すべく、鍼刺激による麻酔を主体とした帝王切開術を行ない、一応の成果をおさめたので、その詳細について報告する。(以下略)

新しい麻酔法

——静電界麻酔とその甲状腺垂全摘出術への応用——

Static electrical analgesia and its application of thyroidectomy

東京・谷クリニック 谷美智士 浜松・医療センター外科 石垣実弘

日本東洋醫學會誌 24 (2) : 1-7, 1973

東洋医学の一つである針治療は、ほとんど古代東洋史と共に始まり、すでにB.C. 4世紀頃には体系づけられ「黄帝内経」に集約され記載されている。従って、近代に至ってModern Medicine が用いられるようになるまで針治療は東洋医学の主流の一つをなしていた。(中略)

一方、1958年上海で、初めて針麻酔によって扁桃腺摘出術に成功したと伝えられているが¹⁾、日本では1969年、間中と谷が中国とは別個に虫垂突起切除術に応用して成功した²⁾。その後、谷は7種類の手術にそれを応用して約80%程度の成功をおさめた³⁾。

しかし、針麻酔の発現機序は現在まで、体液

説⁴⁾、自律神経説、神経説、催眠説等多数の想定があるが未だに不明とされている。しかるに谷は1964年、体表の温冷刺激による一種の民間療法に注目し、人体の知覚、特に痛覚が人体局所の静電位と密接な関係にあることを知った。さらにこの静電位変化が、針治療と深い関係にあり、特に異種二金属接触療法は、体表の微小な電位をたくみに利用したものであり、静電誘導を利用して人体に触れることなく、局所の電位を経絡理論に基づいて変化させるとき、針治療と同様の効果を上げることをつきとめた。(以下略)

『The American Journal of Chinese Medicine』

The effects of long-term herbal treatment for pediatric AIDS.

(小児エイズの長期生薬治療の効果)

Tani M¹., Nagase M., Nishiyama T., Yamamoto T., Matusa R.

¹Chohakukai Medical Group Tani Clinic, Tokyo, Japan.

Am J Chin Med. ; 30 (1):51- 64, 2002

Abstract

This paper presents our long-term (1992-2000) treatment of pediatric Acquired Immune

Deficiency Syndrome (AIDS) patients (maximum 100 children, last three years 65) using native

herbal remedies in a voluntary medical assistance program in Constanta, Romania. We primarily report the progress of 10 children at a facility called the “House of Tomorrow” and three other facilities. The long-term (8 years and 8 months) treatment contributed to a drop of the amount of Human Immunodeficiency Virus Ribonucleic Acids (HIV-RNA) below the measurable level for 9 out of 10 patients at the “House of Tomorrow.” Furthermore, the treatment led to preservation and increase of

the cluster of differentiation (CD4) count, a remarkable decrease in mortality rate, as well as the maintenance of a good quality of life. It took one to three years for the beneficial effects of the treatment to emerge. No side-effects were recognized either clinically or biochemically, nor was there any emergence of drug-resistant strains of HIV as seen with anti-HIV chemical treatments. This paper also refers to which herbal remedies were used and their general mechanism of action. (以下本文は英文、略)

中国医学学術誌 『東方医学』 Eastern Medicine

第20回日本東方医学会 記念講演

日本東方医学会——その歩みとこれからの任務

谷美智士

日本東方医学会

東方医学 19 (2) : 1-11, 2003

できるだけ簡略に、私どもの日本東方医学会がどのような経緯でできたのか、それから現在の状態と将来への一つの希望というものをお話し申し上げて、学会員の先生方の更なるご発展に寄与できればと考えております。

では、スライドを通しまして、お話をさせていただきます。このスライドは、この学会を設

立することの元になる大きな出来事と考えています。これは1969年に間中病院において日本で初めての針蘇酔手術をやりましたが、大変良い結果を得ることができた針麻酔の虫垂炎手術で、執刀する直前の状態であります(写真1)。このことが後々、会の設立へと大きく影響してくるよう考えております。(以下略)

中医臨床カンファレンス

戴静徳・趙国芳・谷美智士¹⁾・下谷武志(進行司会)¹⁾

¹⁾ 編集部

東方医学 20 (3) : 51-62, 2004

臨床的な点から述べますと、私も蕁麻疹の治療をいろいろしてきましたが、やはり相当の率で裏、寒の障害が絡んでいる症例が見られるんですよ。いみじくも先程、下谷先生がアグレッシブに仕事をしすぎるような人が蕁麻疹になりやすい、とおっしゃっていました力、全くそのとおりで、そういう状態にある人というの

は、要するに寒実になってくるわけですね。そして風邪を煽る、といいますか、風邪の上昇を促して表面化してくる、という印象が非常に多いですね。ですから今、先生方が述べられましたような部分にプラスして、この症例でも、朝晩痒みが出て、冬は床に入ると痒くなる、というところで、それは先程の五行の考え方で少し

触れられましたが、宇宙の考えからいいますと、夜に出てくる病気というのは肝胆の障害が非常に多いわけです。それを頭において方剤を選んでいますと、抑肝散や柴胡加竜骨牡蛎湯とか、蕁麻疹に関しては、竜胆瀉肝湯まではいかない

ですね。

まあ、そういった辺りを頭に入れて先程先生方が選んだ方法に加えて治療していきますと、治る率が高くなるでしょうね。 (以下略)

第22回日本東方医学会シンポジウム「東方医学に期待されるもの」

東方医学の立場から

谷美智士

長白会タニクリニック

東方医学 21 (1) : 19-28, 2005

東方医学が医学全体の中で果たしてどのような役割があるかということですが、実は司会者の方から、東方医学に関わった経緯から話してくれと言われておりますので、簡単にそこから入っていききたいと思います。

私がこの東方医学に入りましたきっかけというのが、実は母親の病気でありました。私は母ひとり子ひとりの母子家庭で育ちまして、母親は公務員でございましたが、大変苦勞して私を医学部に出してくれました。その母親が皮肉にも卒業式の日に倒れたんです。その原因は胃癌でして、手術をすぐにしました。その後は再発を繰り返しまして、2度3度と手術をいたしました後に、2年半後に亡くなったわけですが、

そのときの私は、母親の闘病生活を通しまして2つのことを大きく自覚したと思っています。

1つは、やはり少なくともガンの末期に関しては、現代医学はほとんど手がないと、患者さんが喜ぶことはできなかったのではないかなど、そういう失望感を、まだ今から医学を勉強する立場におりながら、実感させられました。

それからもう1つは、実は私に隠れて母親がやっておりました東洋医学の治療というのがあって、私も後日、それを見学いたしました。実は今まで私どもが習ってきた西洋の医学とは全く違う医学があるという、その2つのことを母親の死を通して認識させられたわけでありました。 (以下略)

日本東方医学会 会長特別講演

難病治療——医食同源と食べ物の重要性

The botanical treatment for incurable disease —— importance of food

谷美智士

長白会タニクリニック

東方医学 21 (2) : 1-9, 2005

要旨：医食同源（薬食同源）の考えに基づいて、基本的な中薬方剤である葛根湯など多くの方剤は全構成生薬を食品で置き換えることが可能である。

一方、免疫失調に起因する様々な難治性疾患——各種のアレルギー疾患、膠原病、悪性腫瘍など——の治療は、やや長期間を要する体質改

善がよく奏効する。その際に用いる生薬は食品によって構成されたいわば食品方剤が有利である。

膠原病（SLE）、関節リウマチ及び難治性アレルギー性鼻炎（通年性）の各症例を提示し、現代における難病治療の可能性を示す。

(以下略)

キーワード：難病、膠原病、免疫失調、食事、
アレルギー性鼻炎、花粉症

第23回日本東方医学会 市民公開講座講演

食べて治す花粉症

谷美智士

日本東方医学会

東方医学 22 (1) : 1-12, 2006

皆さん、こんにちは、谷でございます。
今日は花粉症を中心にお話し申し上げたいと思
いますが、ご承知の通り、今も落合先生のお
話の中で、花粉症というのは昔はなかった病
気ですよ。年配の方、ご存じでしょう。1970
年以降に出てきた病気ですね。世界中になか
った病気が、どうしてこんなに出てきたんだ
らうと。

たかが30～40年の間、我々現世人は、400

万年か500万年の歴史を持っていると言われて
います。ところがたった30～40年の間に、国
民の3割にもなろうような病気が出てきてしま
いました。しかも残念ながら現代の医学では完
治出来ない。

これは一体どういう事だろうと、今日はこの
ようなことを中心にお話を申し上げて、皆さん
方の何かの糧になればと考えております。

(以下略)

中医臨床カンファレンス

肥満・高血圧・胸痛

戴静徳・林建豫・中村・谷美智士・下谷・山本・木村・平井

東方医学 22 (1) : 49-65, 2006

〔討論中「ホメオパシー分析」の中での発言〕

感覚的にやっていると、要するにホメオパ
シーとは何かということでは、我々が勉強して
いる中医学、漢方医学との比較をしていくと、
何となくわかりやすいかと思えます。西洋医学
はこれはちょっと違った世界と言えますので、
比較にならないと思えますね。

要するに中医学でいう気の世界とホメオパ

シーは、かなり近いものがあるといえますで
しょうね。もう一つ、東洋医学、それも中医学
は分析的ですよ、弁証分析の世界です。その
分野においては、ホメオパシーはやや苦手な部
分があると言えらると思えます。むしろパターン
把握とメディスンという、いわゆる日本漢方医
学の考え方を持ったほうが、やや理解しやすい
のではないかと、思えます。(以下略)

第23回日本東方医学会 会頭講演

微細エネルギー (気・Vital energy) の活用と東方医学

谷美智士

長白会タニククリニック

東方医学 22 (2) : 1-16, 2006

今、頂きましたようなテーマでお話をさせて
頂きます。ただ私、臨床医でございますので、

いわゆる客観的なデータというものをあまり
持っておりません。

しかし、経験の中で、事実は事実として認識しながら、本日までやって参りました。

それで今回、私がずっとやって来ましたものの中を、もう一回振り返る形で、先生方のお役に立てるような部分、特にこの「Vital energy」いう、ホメオパシーとか波動とか気とかという問題が、この学会が先鞭をつける形で、代替医療界に表わされてきた昨今ですので、何かのお役に立たせて頂ければと思っております。

今日お話し申し上げますのは、私が母親をガンで亡くしてから、私のライフワークは、生薬、自然療法によるガン治療ということで、今まで35～36年やって参りました。

最初の頃、今から20年ほど前は、それぞれ

に有効ではあったんですが、完全に良くなるケースはその時点では、数パーセントのレベルだったと思います。

しかし最近になりまして、色んな微量治療を活用させて頂くようになりまして、十分な治療期間さえあれば現在では2割、あるいはもっと上のレベルに来たように、自分では自覚しております。

「お役に立てるようなところまで来たんじゃないかな」という実感を持っております。

ご承知のように、再発した悪性腫瘍というのは、なかなか現代の医学では完治ができないというのも事実でございますので、そういう臨床例を踏まえながら、お話をさせて頂きたいと思っております。 (以下略)

市民公開講座講演 講演 2

「食べて実践 難病対策——癌、膠原病」

谷美智士

日本東方医学会

東方医学 23 (1) : 11-20, 2007

皆さん、こんにちは。御紹介にあずかりました谷でございます。

いただきましたテーマは大変大掛かりなテーマでございますので、なかなか30分ではお話しは尽きないと思いますが、今日は、医食同源と

いわれるように良い食物は体によいと言われるけれども、どのくらいいいのかということですね。それからどういうふうな考えで、食べ物食べていかれたらいいかということについて、まず、お話をしていきたいと思っております。

原著 難治性疾患に対する生体活性療法 (BAT)

BAT (Bio Active Therapy) for several incurable diseases

森秀樹*・谷美智士**・山本竜隆*・下谷武志**・山口トキコ***・長瀬眞彦****

*(医)長白会タニクリニック、**永楽堂クリニック、***マリーゴールドクリニック、****吉祥寺中医クリニック

東方医学 23 (3) : 7-15, 2007

要約：著者の一人である谷は、難病認定疾患のうち、免疫機能の異常が原因となっている自己免疫性疾患に対して、治療茶、漢方薬、ホメオパシー的治療、化学方剤、その他を組み合わせた東方医学的総合治療を行い、良好な成果を確認してきた。

自己免疫性疾患のうち関節リウマチ患者 23

人 (男 2 人、女 21 人、平均治療期間 52 週) においては、著効 3 名、有効 16 名、無効 4 名であった。自己免疫性疾患全体では、患者 53 人 (男 7 人、女 46 人、平均治療期間 106 週) のうち、著効 11 人、有効 32 人、無効 10 人であり、有効率は 81% であった。単独の治療法では、なかなか改善しない難治性疾患も、複数の東方医

学的治療を組み合わせ、生体を活性化し、体質が改善することにより、治療できる可能性が高まる。現在、著者らは協力して、諸種難病の治療にあたっているが、このような東方医学の治療を総合してBAT（生体活性治療）と総称するのが一つの適切な表現方法と考え、ここに

提言したい。

キーワード：漢方、ホメオパシー、自己免疫疾患、関節リウマチ、難病、膠原病、東洋医学、東方医学

(以下略)

中医臨床カンファレンス

下痢症

戴静徳・趙国芳・中村・谷美智士・下谷・山本・興津・山口・堀・飯塚・木村・平井・中塩・今井
東方医学 23 (3) : 31-40, 2007

これは皆さん中医学を一通り勉強なさった方にとっては、おそらく易しい症例ですね。ですから下谷先生が皆、同じことを言うのではないかとおっしゃっていたとおりでと思います。

ただし、易しいんですけども、これを西洋医の先生が治そうとすると、非常に難しくなってしまうんです。はっきり言って、下手なんです。やりようが無い。やはり化学薬品しか使わない、という治法は体にとって負担としかいえません。だからこういう脾胃の弱い方にいつまでたってもH2ブロッカーを与え続けたりして。だから、このような症状の方が来たら、喜んで先生方は治療をしてあげましょう。非常に反応しやすいです。とても治しやすいです。逆

に言うと、このような症状の患者さんを治せない中医の医者というのは、ちょっと問題があるといえますよね。

こういう人は大抵あらゆる病院、治法を試しているんですね、残念ながら漢方医学だけ除いているんです。そして最後に漢方医にたどりついて来るんです。漢方医のどこか一つに行ったら治まったのに、という方ですよ。だから、このような症状の患者さんが来たら喜んで治してあげましょう。そして、たちまち症状は改善するでしょうから、そうするとまたその人は患者さんをわんわん連れてきますから。そういう症例といえますよね。

(以下略)

市民公開講座 1

病気になる食べ物——日本の食事が危い

谷美智士

日本東方医学会

東方医学 24 (2) : 1-10, 2008

我が国には御承知のように現代医学、西洋医学とも言いますがこの現代医学と、古くから漢方を主体にした伝統医学、いわゆる東方医学あるいは東洋医学というのがあります。実はこれが全く同じようなものであれば何も紀元前の古い中国医学を今さら持ち出す必要はないんですが、実は大きな違いがあります。ということ

ということなんです。

その違いを簡単にここにシェーマで書いてみました。病気を西洋と東洋ではどういうとらえ方をするかといいますと、健全な人体がここにあるとしますが、ここに病気が入ってきたといたしますと、西洋医学の方はまずこの病気に目を向けます。これが何であるかということ、いろいろな診断法で確認するわけです。そして

例えば感染症であれば、その感染症に有効な抗生剤を見つけて、体を介してそれを攻撃するわけです。そして、これを消滅して健康を取り戻す。目標がここ、病原因にあるわけですね。

ところが、東方医学、東洋医学というのは古い医学であるため、病気の原因はわからないんです。紀元前のことですから、わかっていようはずがないわけです。中医学は既に2,300年前に原書が編纂されております。今でもこれは中国では原書で一番のバイブルとして使われておりますから、何が病気の原因かというのはわからないんです。

どうするかというと、病気の原因を探す代わりにその人の体をよく見ます。脈診をして見た

り、いろんな体の状態を見て、体が正常からどういう方向に歪んでいるかということを見るわけです。体がよりよい状態にいくように、体に作用させますから、体にうまく作用させるためには、これは化学物質よりも自然のものの方がうまく体に吸収されるわけです。そして、身となり血となる。そうするとその結果、病因が自然に消滅する。

この東方医学の治療のキーワードは、いわゆる免疫系というものです。体を良くする、すなわち免疫系を賦活することによって病気が治っていくという、西洋医学とは大きな違いがございます。(以下略)

臨床経験 BAT (Bio Active Therapy) による関節リウマチの治療成績

The result of BAT (Bio Active Therapy) for Rheumatoid Arthritis

森秀樹・高橋博樹・谷美智士

(医)長白会タニククリニック

東方医学 25 (4) : 33-44, 2009

要約：谷が開発し、タニククリニックにおいてBAT (Bio Active Therapy) で関節リウマチの治療を受けてきた患者22人について、初診時と現在の状態およびデータを比較するretrospectiveの研究を行った。各患者について、EULAR改善基準に基づいて評価した。また参考のために、ACR改善基準に基づく評価も行い、西洋薬の使用状況も調査した。EULAR改善度は、good responseが9人、moderate responseが8人、no responseが5人であり、22人中17名(77%)で効果が認められた。マン・ホイットニ検定では、good responseの患者は、no responseの患者に比べ

て優位にACR改善度が高かった。また、good responseの患者9人のうち6名は、初診時、ステロイドや抗リウマチ薬は使用しておらず、最終的には、good responseの患者全員がステロイド、抗リウマチ薬を中止することができた。BATは免疫機能を改善することにより、ステロイドや抗リウマチ薬を使用しないで治療することも可能であり、関節リウマチの治療方法として有用だと考えられる。

キーワード：関節リウマチ、漢方、難病、自己免疫性疾患、DAS28、EULAR改善基準 (以下略)

原著 自閉症へのBAT療法(Bio-Active Therapy)の有効性について

The effect of Bio-Active Therapy (BAT) to autism

高橋博樹・森秀樹・谷美智士

医療法人社団長白会タニククリニック

東方医学 26 (1) : 65-72, 2010

要旨:自閉症は、社会性や他者とのコミュニケーションを中心とした能力の発達が遅滞する発達障害で、現在有効な治療法は見つかっていない。原因は不明とされているが、環境因子、免疫学的因子、遺伝的因子の関与が想定されており、最近、免疫機能異常を示唆する報告、特に自己免疫的機序を示唆する報告が増えている。

共同研究者の谷は、自然素材を使った治療茶、漢方薬（抑肝散を使用）及び少量の化学薬品を用いたBAT療法（Bio-Active Therapy：生体活性治療）を開発した。

BAT療法は、自己免疫性疾患に効果を認めている。そのため、BAT療法の内容を理解して、治療を希望した自閉症児8例（平均7.5±4歳）について、治療開始前と12ヶ月経過時点での

症状を比較した。評価は、小児自閉症評定尺度（CARS：Childhood Autism Rating Scale）によって行い、各項目および全項目の合計点数で評価を行った。CARSは15項目の行動評価と合計点数で、自閉症の診断と重症度を評価する評価尺度である。評価の結果、全項目の合計点数の平均については、治療開始前38.8点、6ヶ月経過時点31.3点、12ヶ月経過時点30.8点と有意な改善傾向を示した。BAT療法は、通常の漢方薬治療に較べて付加的な効果が期待でき、低価格で副作用の少ない治療法といえる。今後、治療期間を延長して評価をしていきたい。

キーワード：自閉症、BAT療法、抑肝散

(以下略)

市民公開講座3

現代に東洋医学が必要なわけ——難病や自閉症を治す

谷美智士

(財)東方医療振興財団

東方医学 26 (3) : 13-25, 2010

皆さん、こんにちは。よくお集まりいただきました。今日、私は「現代に東洋医学が必要なわけ」というタイトルで、臨床的なことを主にお話し申し上げて、御参考にしていただければと思います。

前にお話しいただきました劉影先生、天野先生のお話と相通ずる部分があるかと思いますが、できるだけわかりいただけるようにお話しをします。今日の話の内容は、実は大変な

情報量ですから、わかりにくい点があるかと思いますが、十分集中してお聞きいただきたいと思います。

まず、東洋医学と西洋医学というのは一体どこが違うのか、西洋医学がこれだけ進歩しているのに何で今ごろ東洋医学なんのでしょうか、3,000年、4,000年前の医学が今日に求められるようになってきているのかということから、お話ししてみたいと思います。(以下略)

ディベート

癌治療——西洋医学 vs 代替医療

化学療法と代替医療

山本竜隆*・安達勇**・谷美智士***

* 朝霧高原診療所、** 静岡県立静岡がんセンター、*** (財)東方医療振興財団

東方医学 27 (2) : 1-25, 2011

安達先生のお話を受けまして、私の方で代替医療が現状どのような状況であるかということ

をまずお知らせ申し上げたいと思います。

残念ながら代替医療には、いわゆる標準医療

といましようか、そういうものが統括されておきませんので、そういった意味で、今私のところでやっているものの症例等々を提示させていただいて、それを参考にさせていただきたいと思っております。

昨年度1年間に外来に来ていただきました患者さんの中で、うちは外来しかないんですが、6ヶ月以上経過を見られた方のデータを出しております。全部で187例でございます。一番多いのは乳がんの43症例でございます。治療法はいろいろございますが、主として生薬と食事指導と漢方、あるいは気の治療というふうなもので、私ども医療法人長白会におきましては、タニクリニックという保険診療専門のクリニックと、長白会診療所という自費専用のクリニックが同じビルにございまして、そちらで自費の診療と両方併用いたしております。年齢構成は60代が一番多くて、50代、70代と、これは普通と余り変わらないと思います。

187例の経過を見てみますと、著効というのは、要するに腫瘍がなくなっていくとか、あるいは非常に高いトゥモールマーカーが正常値になって、半年ないし1年もずっと健康で過ごすとか、そういう明らかに客観的なデータとして寛解状態になったのを著効。有効は、マーカーが下がるとか、あるいは腫瘍が小さくなったり、余り発展しない、増悪しないというもの。

良好というのは、これは私たち独自の表現になってしまいうんですが、大抵の方は手術をし、それから化学療法、必要であれば放射線治療をします。実は、その後が、患者さんは再発して

ほしくない、がんになった方というのはその気持ち非常に強いんですね。それで、何とかしてほしいんだけど、今の現代医療の中では、例えば月に1回、あるいは2ヶ月に1回というふうな、だんだん診療回数を減らしながら、継続的な血液検査とか画像診断をして、何ともなければいいですよということですね。

しかし本人の意思としては、お医者さんは何かあったらすぐに処置をしてあげるよと言ってくれるんですけど、何かあっては困るんです。何もないようにしてほしいんですよ。ところが、そのこの部分のケアが現代医療では、非常に薄いのではないかなと。そういうことで、代替医療のようなものを求めて来られる。その来られた人の中で、ずっと経過がよくて、治療年数が平均で5年8ヶ月、何にも悪い変化がなかったケースというのを良好として、別に出しております。

あとは不変。これはがんの種類によってはゆっくり進行するというのもありますし、それは一人ひとり違いますが、私どもの考えから言いますと、複数年にわたってがんが増悪していないというのは有効ではないかと思うんですけど、一般のがんの有効性の診断では不変というのは余り有効とはとらえられていない部分が多いので、あえて不変としております。そういう中で、不変を一応増悪、死亡という中に入れて見ますと、約8割ちょっとが大変いい状況です。死亡が6例ございました。3.2%の死亡ですから、死亡率としては大変に低いというふうに私どもは認識しております。(以下略)

シンポジウム

医療の中での統合医療の役割

今西二郎*・川嶋朗**・谷美智士***・山本竜隆****

* 明治国際医療大学附属統合医療センター、** 東京女子医科大学附属青山自然医療研究所クリニック、

*** タニクリニック、**** 朝霧高原診療所

東方医学 28 (2) : 1-33, 2012

では、お時間も差し迫っておりますので早速始めます。

統合医療の確立を目指してという今回の会頭のメインテーマでございますので、それに沿っ

て、私でできることで、今、どういうふうにしたら一番統合医療に早く近づいていけるかというのを、私の実践を通して考えてみました。

最終的に西洋医学はいわゆる全人医療でもありませんし、たびたび皆さん演者の方がおっしゃっているように、西洋医学だけでは医療全体はカバーできていないですね。その辺のことをしっかり認識していただくのもまた一つの方法だろうということで、幾つか事例を挙げながらお話をしたいと思います。

これを見ていただきますと、要するに西洋医学というのは、人体にもし病気があった場合にはそれをまず見つけて、その病気そのものを徹

底的に攻撃していこうと。その結果、こういうふうにして改善するというのが基本ですね。ですから、原因除去医療と言われますし、逆に今度は東方の医学というのは、もともと病原が何であるかということは古い時代の医学ですからわからないわけです。したがって、何をみているかということ、人体をじっくり見えています。これによって、人体がどのように歪んでいるかということを見つけて、この人体に治療を施すわけです。その結果、これを排除できることもあるし、また、勿論排除できないこともございます。(以下略)

原著 関節リウマチ患者に対する治療茶と漢方薬を使用した 生体活性治療 (BAT) の臨床経験

Clinical experience of Bioactive Therapy (BAT) using herb tea and herbal medicine
for Rheumatoid Arthritis Patients.

森秀樹*・谷美智士**

* 桑名西医療センター、**(医)長白会タニククリニック

東方医学 28 (2) : 55-64, 2012

要旨：この研究は、東方医学に基づいて開発され、ハーブティ、漢方薬、微量西洋薬の組み合わせからなる生体活性療法 (BAT: Bioactive Therapy) の関節リウマチ患者における効果を評価するために行った。

この研究では、タニククリニック (40 人) またはマリーゴールドクリニック (2 人) で BAT を受け、アメリカリウマチ学会の 1987 年改訂基準を満たした 42 人の関節リウマチ患者を、DAS28-CRP によるヨーロッパリウマチ学会 (EULAR) 改善基準に基づき、DAS28-CRP を BAT 開始時と BAT 治療後で比較して、レトロスペクティブに評価した。

42 人のリウマチ患者を、2つのグループに分類した。BAT を受けている間に、抗リウマチ薬 (DMARDs) も糖質コルチコイドも使用し

なかった患者をグループ 1 (23 人)、いずれかあるいは両方を使用した患者をグループ 2 (19 人) に分類した。

BAT 治療後の DAS28 は、BAT 開始時の DAS28 に比べて、グループ 1 ($p=9.3E-10$)、グループ 2 ($p=7.7E-06$) とともに有意に改善していた。EULAR 改善基準に基づいて評価すると、BAT の治療効果は、グループ 1 とグループ 2 の間に有意な差はなかった ($p=0.38$)。副作用はほとんどなく、数名の患者が、吐き気等を訴えたのみであった。BAT はリウマチ患者にとって有用であると考えられる。

キーワード: 関節リウマチ、漢方薬、ハーブティ、代替医療、自己免疫性疾患、気のエネルギー (以下本文は英文、略)

原著 自閉症へのBAT療法(Bio-Active Therapy)の有効性について ——自閉症治療の可能性——

Effectiveness of Bio-Active Therapy (BAT) on Autism : Potentiality of Treatment of Autism

高橋博樹・谷美智士

医療法人社団長白会タニクリニック

東方医学 28 (4) : 1-15, 2012

要旨：自閉症は、社会性や他者とのコミュニケーションを中心とした能力の発達が遅滞する発達障害で、原因は不明とされており、有効な治療法は開発されていない。しかし、最近、免疫機能異常との関連を示唆する報告が増えている。共同研究者の谷は、自然素材を使った治療茶および漢方薬（主に抑肝散を使用）を用いたBAT療法（Bio-ActiveTherapy:生体活性治療）を開発した。

BAT療法は、自己免疫性疾患に効果を認めている。そのためBAT療法の内容を理解して、治療を希望した開始時点92例（初診時2歳から23歳、平均6.5±3.8歳）について、治療開始前とグループ別に6ヶ月毎に、最長30ヶ月経過時点までの症状を比較した。

平均治療期間は17ヶ月で、全例現在も治療中である。評価は、小児自閉症評定尺度（CARS: Childhood Alltism Rating Scale)によって行い、

各全項目の合計点数および項目毎の評価を行った。その結果、有意な効果を認めたので報告する。

評価の結果、全項目の合計点数の平均については、治療開始前37.6点、6ヶ月経過時点31.9点、12ヶ月経過時点29.5点、18ヶ月経過時点28.9点、24ヶ月経過時点27.4点、30ヶ月経過時点25.1点と、6ヶ月経過時点以降で有意な改善を示した。年齢別では、治療開始時期が8歳未満で顕著な改善がみられた。

BAT療法は、通常の漢方薬治療に較べて付加的な効果が期待でき、低価格で副作用の少ない治療法といえる。今後も、治療期間を延長して評価をしていきたい。

キーワード：自閉症、BAT療法、抑肝散、CARS、自然療法

(以下本文は英文、略)

特別講演

東方医学30年の歩み

谷美智士

一般財団法人東方医療振興財団

東方医学 29 (1) : 23-36, 2013

今回、30回目を迎えるということで、この30年をその少し前から振り返りまして、どういふことをどういふ経緯でどういふふうになったか。それから中国との関係をお知らせして、将来の先生方の糧にさせていただければと思ってお話をさせていただきます。

このお話をするに当たって、どうしても避けて通れないのが針麻酔ということでございます。この写真は、我が国第1例目の針麻酔の術前の状況でございまして、針麻酔というのは、

私が長崎大学にいるところからこのアイデアを持っておりました。

間中病院に参りましてから約1ヶ月後に、ちょうど私が当直のときに虫垂炎の子供が参りまして、両親に針麻酔の許可を得て、といひますか、間中病院というのは、箱根から降りてきて最初の病院なんですね。お越しになったこの方の御両親も箱根で農業をなさっている方で、要するに「何もわかりません」と。

というのは、私が虫垂炎の手術の麻酔には、

通常、腰椎麻酔、全身麻酔、それと針麻酔がありますと言ってしまったものですから、当時、そういうことは私が初めて言ったのではないかと思いますけれども、「何もわかりませんから全てお任せします」という御返事を得て、「それじゃ、針麻酔で」と針をやりまして、鈍麻が

出てまいりましたので、夜中でしたけれども、病院の隣に間中先生の住居がございまして、間中先生を起こしまして間中先生に「執刀してくれませんか」ということで始まったものがこれでございます。(以下略)

市民公開講座

心とからだを癒すお話とメロディー

大塚貢¹⁾・谷美智士^{2),3)}・鳥越俊太郎⁴⁾・山口時子⁵⁾

¹⁾教育・食育アドバイザー、²⁾(一財)東方医療振興財団、³⁾(医)長白会タニククリニック、

⁴⁾ニュースの職人、⁵⁾マリーゴールドクリニック

東方医学 30 (3) : 1-34, 2014

皆さん、今、大塚先生から実際面のことをいろいろと勉強いたしました。食事というものは、意外な面で意外なところに影響しているのだなということが、私を含めて皆さんおわかりになったかと思えます。

私は医師といたしまして、その中でもう少しベーシックなところ、免疫系ということにつきまして、お話を絞って話したいと思えます。

実は、免疫というものが、後ほどお話ししますが、中医学という中国でやっております漢方、いわゆる中国の伝統医学、その一部が日本に遣唐使を通して入ってまいりまして、それが今、日本で漢方となっておりますが、中医学というのは、うんと恐らく何十倍と幅広いものでございまして、その中に、実は「衛気」という言葉で2,350年前に書かれました。それまでにやって

きた伝統医学を集大成したものでして、その中で、既にもう書いてございます。

尿の検査も、血圧の測定もできない時代に、どうしてそれがわかったのだろう。白血球の働きがどうしてわかったのだろうということですが、そういったものを含めまして、お話をしたいと思えます。

御承知のように免疫というのは、白血球が主体に働いてくれます。人間での防衛の最大の組織でございます。実は、はっきり言いまして、免疫以外に体を守っていく仕組みというものは余りございません。神経もホルモンも、それから赤血球の血液も、これは全部体を動かすものです。守っているものは唯一、免疫、白血球でございまして、外敵に対抗して体を守っております。(以下略)

その他の雑誌

鍼麻酔による帝王切開の経験

蠣崎要・谷美智士*・石塚栄一

がま産婦人科、*タニククリニック

日本良導絡自律神経学会雑誌 17 (11) : 224-227, 1972